

# 都市部の新設店舗における生産者と消費者の交流

— JA兵庫六甲の産地見学会 —

主席研究員 重頭ユカリ

## 1 食と農を通じた地域交流拠点の新設

JA兵庫六甲は、2018年3月に神戸市の御影地区に「御影JA総合センター」を新規オープンした。「食と農を通じた地域交流拠点」をコンセプトとする複合施設であり、地元の新鮮な農畜産物を販売する直売所「マチマルシェ御影」、地元食材を使ったランチやカフェメニューを提供する「御影キッチン」、料理教室やセミナー、サークル活動を行う「クリエーションルーム（多目的室）」、金融店舗「御影支店」から成る。

同センターは、①農地がなく農家組合員がいない地区への新設、②直売所と金融店舗が仕切りなしに併設され、スムーズな移動が可能、③高級住宅地という地域特性を踏まえ、直売所の品揃えはこだわりの品が中心という特徴をもつ。

## 2 地域の生産者と消費者の交流

同センターの設立目的は、農村部と都市部、生産者と消費者をつなぎ、両者が対話する場などを企画したりすることで、お互いに交流を深め、双方にとって新たな発見や学びにつ

ながる機会を創出することである。そこで同センターでは、周辺の自治会や婦人会の代表者等に、JAの取組みについて報告したり生産者と交流したりする会を数回にわたり催してきた。そのなかで「実際の産地を見てみたい」という声があがり、19年3月に「マチマルシェ御影」に出荷する生産者の産地見学を行う運びとなった。

## 3 地域の生産者の農場を訪問

当日は午前中に御影を出発すると、市内西区の藤原さん親子の農場を訪問した。父・和幸氏の節水トマトは糖度が高いと人気があり、実際マチマルシェ御影でよく購入している参加者もいた。トマト栽培で約半世紀の経験を持つ同氏であっても、さらに新しい栽培方法にチャレンジしていることや、以前はできるだけ大きいトマトを作っていたが今は小さいトマトに需要があるという説明を受けた。参加者からは「肥料はどのようなものを？」等の質問が相次ぎ、出だしから活発なやりとりが行われた。

イチゴの栽培を担当する息子の博行氏は、自分の子どもがハウスに遊びに来た際、勝手に摘んで食べても安心であるよう、できるだけ農薬を使わないようにしている。農薬の代わりに、葉ダニを食べる益虫を利用しているのだという。そうした話を聞きながら、参加者は自ら摘んだイチゴを味わった。

続いて、有機栽培で20種類以上の野菜を栽培する池上農園を訪問した。池上氏は、都市農業という特質を踏まえ、消費者と交流しな



JA兵庫六甲 御影JA総合センター（JA提供）



イチゴのハウスを見学(筆者撮影)

がら持続可能な農業を行うため、有機栽培を選んだ。最近では、飲食店が緑以外の色付きの葉物野菜を求める傾向があること、通常はあまり売れない成長しすぎた野菜を欲しがると、炭を使った土壌づくりや微生物の発酵を促進する等の栽培のポイント、有機農産物の価格について詳しい説明が行われた。

市内北区へ移動し、昼食のために訪れたのは弓削<sup>ゆげ</sup>牧場である。住宅街からほど近い牧場では、約50頭の牛が飼育され、牛乳として出荷するほか、地元で人気が高いチーズやスイーツ等の加工品も製造している。レストランでは、乳製品をふんだんに使った食事を出しており、この日も多くのお客さんが来ていた。

食事をとりながら、弓削さん夫妻から、牧場の歴史や農協や大学等との関わりについて話を聞いた。弓削牧場では、糞尿等から発生するメタンガスからバイオガス発電を行い、発電の副産物である液肥を野菜の栽培に活用しており、牧場内で循環がなされている。また、搾乳ロボットを導入したことで、働き手の休みを確保できるようになったのだという。

最後に、JA兵庫六甲がフルーツフラワーパーク内で運営する「ゆめファーム兵庫六甲」を訪問した。同ファームは、国や市からの補

助金も得て15年にJAが建設した最先端型園芸施設である。JAはこの施設を活用して、17年から新規就農者に対する農業経営者育成塾をスタートしている。

トマトとイチゴのハウスで、ICTを活用した最先端の農業生産についてJA職員から説明を受けると、参加者からは「これまでの農業の概念が変わる」「カルチャーショックだ」という声が上がった。

#### 4 活発な質疑応答で深まった理解

いずれの訪問先でも、生産者の農業に対する熱い思いと高い技術力を基盤に、味や安全性にこだわった農産物が作られていることがよく分かった。それは、訪問後のアンケート調査で「実際に訪問してみて、生産者の方の品質向上への努力がよく理解できた」という意見が多かったことから明らかである。

また特筆すべきは、参加者から様々な質問が出たことを受け、生産者の説明も当初より踏み込んだ内容となったことである。例えば、生産量をただ増やしても、収穫する人手や販路がなければ経営は成り立たないこと、観光農園を新たに始めたいと思ってもやはり人手がなければできないこと、子どもが後を継ぎたいと思える安定した経営を持続させる必要があること等である。質疑応答により、そうした課題があることが浮き彫りとなった結果、JAが直売所を運営したり、新規就農者の育成に積極的に取り組んだりする必要性をよりよく理解することができたと考えられる。

参加者からは、こうした有意義な取組みを継続してほしい、次回は若い人にも参加を呼びかけてほしいといった意見も出た。組合員がいない地区における生産者と消費者の交流は、相互の理解だけでなく、両者をつなぐJAの事業や活動の理解促進にも貢献すると考えられる。

(しげとう ゆかり)